
『韃靼漂流記』にみる弓馬の意義

小林 寛¹
金 河 守²

要旨

『韃靼漂流記』は、1644年に日本の越前商人が大風に逢い海上を漂流し、彼らのいう「韃靼国」すなわち「清朝」に漂着した経験を、3年後に帰国して徳川幕府の官吏に口述筆記してできている。『韃靼漂流記』には清朝の政治、文化等の幅広い事象が記録されており、「入関遷都」したばかりの清朝の王権の一端を見ることができる。弓術は王権の象徴となっていて、王朝の始祖にはすぐれた弓術が語られる。本稿では『韃靼漂流記』に記される清朝の王族の弓馬の習俗と王権との関係、およびその思想的意義と弓馬の語義とを記す。

キーワード：韃靼漂流記 騎射 清朝 王権

.....

はじめに

『韃靼漂流記』には徳川時代の日本人漂流者が清朝に滞在した経緯が記録されている。1644年、日本の越前の船頭と商人が松前との貿易を考えて三艘の船に分乗して佐渡島から出帆したところ、大風にあって漂流してしまい、「韃靼国」すなわち「清」国に漂着した経験が、彼らが帰国した後に徳川幕府の役人によって口述記録されてできている。彼らは豆満江流域の海岸から連行されて瀋陽に滞在し、さらに北京に1年間とどめられ、そして李朝の朝鮮を経て日本に帰国した。このことは『清朝実録』『李朝実録』にも記録されていて、興味深い符合を見せる。『韃靼漂流記』には、彼らが記録した満州語68語がのせられ、また、ほぼ同数の北京語が載せられており、さらには若干の李朝の朝鮮語も記録されている。本稿では『韃靼漂流記』をとりあげて、清朝王族の騎射の習俗の記述にみる王権と騎射の意義³と、その語義⁴とを考察しておきたい。

(1) 『韃靼漂流記』の成立事情

『韃靼漂流記』の冒頭には覚書に先だて、段を下げて全体の内容を示して、次のように記されている。

越前国三国浦新保村竹内藤右衛門、同子藤藏船二艘、并国田兵右衛門以上三艘に、五十八人乗
くみて、松前へ商のため致出帆、海上にて大風に逢ひ、韃靼国へ吹付られ、同国都へ召寄せられ、
是より大明の北京へ被送、夫より朝鮮の都へ送られ、宗対馬守殿御内古川伊右衛門殿へ被渡、

夫より対馬へ着申候⁵。

「越前の国の三国浦新保村の竹内藤右衛門，同子藤蔵の船二艘，ならびに国田兵右衛門の，以上三艘に，58人が乗り組んで，松前へ商いのために出帆いたしましたところ，海上にて大風に逢い，韃靼国に吹きよせられ，同国の都へ召し寄せられ，ここから大明の北京へ送られ，それから朝鮮の都へ送られ，宗対馬守殿の御内，古川伊右衛門殿へ渡され，それから対馬へ着きました」と記す。『韃靼漂流記』の意義を明確にするために，経緯を略述しておきたい。1644年（寛永21年），日本の越前の船頭と商人58名が蝦夷地の松前との貿易を考えて三艘の船に分乗して佐渡島から出帆した。ところが船団は大風にあつて海上を十数日漂流し，彼らの言うところの「韃靼国」すなわち「清」国に漂着した。『韃靼漂流記』には，その経緯が帰国後に徳川幕府の役人に口述されて，記録された。1644年は明朝が滅びた年で，清朝の初代ヌルハチ（太祖，在位1618～26年），第2代ホンタイジ（太宗，在位1626～43年）⁶に続く，第3代順治帝（世祖，在位1643～61年）が北京に入城した年であった。順治帝は1644年に都を北京に遷して華北に入って「入関遷都」すると，中国全土の支配をおし進めた。

1644年は日本では第110代光明天皇の代，徳川幕府では第3代徳川家光晩年の時代であった。越前の坂井郡の船頭竹内藤右衛門を筆頭として，その子藤蔵，国田兵右衛門たちは総勢58名で3艘の船に分乗し，同年4月1日，三国浦を出て佐渡島に向かった。5月10日，佐渡島を出帆して大風にあい，5月下旬に清の支配する東北区海岸に漂着した。その場所は豆満江流域で現在のロシア領と推定されている⁷。彼らは住民と対応するうち，ここまで漂流して来てしまったからには朝鮮人参を入手して帰るのが良いと考えた。いわば貿易したいとの思いから住民と交渉を始めた。しかしその意思疎通に誤り，住民の計略にかかり陸におびき出されて弓で射かけられ，船に残ったものも射かけられて，竹内藤右衛門と藤蔵をはじめ43名は殺害されてしまった。山では13名，船では2名，あわせて国田兵衛門ら15名が生き残ったのみであった。その後，彼らは今の瀋陽に送られ，さらに清朝の都である北京に送られた。彼らにとって瀋陽は韃靼の都，北京は大明の都に思っていたことが『韃靼漂流記』の記述から推測できる。実際には，当時の北京紫禁城は，大明の都ではなく，その年，清の都城となっている。紫禁城は明が滅びて清の王族が入城したばかりで，荒れており，そうした混乱のつづく北京に，彼らは1年間滞在する。したがって『韃靼漂流記』には「韃靼（清・満州のこと）」と「大明（明・中国のこと）」とが，書き分けて記録されている。清の役人は彼らを漂流民としては厚く遇した。その印象は『韃靼漂流記』には韃靼を丁寧な対応してくれたものとして記しているところに表れている。

一，御法度万事の作法，ことの外明に正しく見へ申候，上下共に慈悲深く，正直にて候。偽申事一切無御座候。金銀取りちらし置候ても盗取様子無之候。如何にも慇懃に御座候⁸。

「一，御法度や万事の作法は，ことのほか，明らかに，正しく見えました。上下共に慈悲深く，正直でございました。偽りをいう事は一切ございませんでした。金銀を取りちらして置いても，盗み

取る様子はありませんでした。如何にも懇懃でございました」と記している。これに対して北京の人の心については良い書き方をしていない⁹ことからそのことが理解される。その後、彼らは李朝の朝鮮を経て、対馬から漂流3年目に日本に生還した。生き残った国田兵衛門、宇野与三郎の両名は、漂流人を代表して江戸に出府して幕府の審問に答えることになる。この口述が幕府の役人によって記録されて『韃靼漂流記』として残ることになった。

その内容は「漂流と遭難の経緯」「奉天・北京への移送」「北京滞在の待遇」「京城を経て帰国する経緯」「満州・漢族・朝鮮の風物と体験・見聞」「満州・漢族の言語」を記したものとなっている。政治・軍事・宗教・風俗・言語・習慣・飲食・城邑・道路・人物等について語られている。この書でいう「韃靼」とは語源からすればタタールのことで、清朝側ではこうした表現を用いて自称することはなく、したがって「韃靼」は清側の呼称ではなく、日本側の呼称で、清朝の満族の地域、文化、人々を指している。

この書は韃靼地域漂流の覚書であって一般に『韃靼漂流記』と呼ばれてはいても、別に『韃靼物語』『異国物語』とも称されて世に写本の形で流布した。口述した作者は直接的には生き残った国田兵衛門、宇野与三郎の二名ということになる。『韃靼漂流記』は徳川時代にあっては非公式ではあっても禁書の部類に属していた。幕府は鎖国をしていたことから海外知識を民衆に普及することを望まず、外国地理書の類は出版を禁止していた。したがってこの書も公刊は許されていなかったため、写本されて世に伝わり好事家に珍重された。明治以前にあってはその全文を刊本としたものはなかった。わずかに徳川時代の1750年に5冊本の『朝鮮物語』と題する啓蒙的読本が刊行され、その中の2冊が韃靼物語の内容をかなり詳細に叙述したものであって、これが刊行されていたに過ぎない。明治29年になって『古老遺筆』によって活字で刊行された。はじめは写本によって流布したため『韃靼漂流記』には伝本があって、衛藤本、石井本などの14の伝本の系統があり、大きくは三種の系統に分かれる。

鎖国された徳川時代にあっては漂流者の口述内容はそれが事実かどうか確かめるすべはなかった。現代の視点から見ると『清世祖章皇帝実録』『李朝実録』『通文館志』の記述や『漂倭解送』の清廷勅諭の送還書があって、これらと内容が符合して『韃靼漂流記』の内容の信用度が高い¹⁰。

（2）『韃靼漂流記』に表れる騎射

まず、『韃靼漂流記』に見える支配層の人物についてみておきたい。第3代順治帝については、次のように記されている。

韃靼総王。御名はチャウテンと申候。御年八歳のごよし、我等共北京に居り申候時承り申候。此王、北京へ引越不断御座被成候。

「韃靼の総王は、御名はチャウテンとおっしゃいます。御年8歳だということを、わたしたちが北京におりました時に承りました。此の王は、北京へ引越して不断は、いらっしゃるということでございます」という。この記述からすれば、彼らが直接に順治帝にお目にかかったわけではないこ

とがわかる。しかしながら、順治帝の近くに居るものから皇帝の現況を聞くことができる位置にいたことも知られる。順治帝の諱は「福臨 fulin¹¹」で、「チャウテン¹²」という音ではなく、また「チャウテン」は順治帝の名前ではない。このことについてアダム・シャルの記述を引きながら、「チャウテン」とは「朝廷¹³」のことであると『韃靼漂流記の研究』においては記されている¹⁴。「韃靼総王」という語は清朝では用いられない。これは彼らが徳川幕府に対して説明する時の語であったとみられる。順治帝や満州の事情や情報に、彼らが身近に触れられたのは、睿親王の配慮によるものであることが推測できる。睿親王「キウワンス」については次のように描かれている。

キウワンスは王の叔父にて御座候。年三十四・五に見へ申候。細く瘦せたる人にて御座候。此人第一の臣下にて上下共におそろおそろ事、歴々の衆も直々物申す事成不申候由にて御座候。町を御通りの節見申候。町人其外も頭を地につけ罷在候。日本の者共は不便に思召候由にて御前ちかく度々被召出、御懇ろに被仰候。

「キウワンスは王の叔父でございます。年は34,5に見たてまつりました。細く瘦せている人でございます。この人は（皇帝の）第一の臣下であって、（身分の）上（のものも、身分の）下（のものも、）ともにおそれることは、いならぶ（大臣の）方々も、直々にはものをもうしあげることできないというほどなのでございます。町をお通りになったときに、お目見えいたしました。町の人やそのほかのひと頭を地につけてひかえておりました。日本の者どもを不憚に思召されたようで、御前ちかくにたびたびお召出しになり、ていねいにお言葉をかけてくださいました。』『韃靼漂流記』では睿親王のことを「キウワンス」という。「キウワンス¹⁵」は「九皇子¹⁶」であって、嫡室の9番目の王子ということを表す。ここには睿親王を皆が皆、恐れている様子が描かれている。睿親王は漂流日本人を接見して興味を示した。満洲の者たちも直々に言葉を交わすことができない睿親王が、親しく声をかけたのは、漂流民に対する破格の待遇であった。順治帝の叔父であり睿親王の兄である「ハトロワンス¹⁷」については次のように描かれている。

ハトロワンスと申は、キウワンスの兄にて是も王の叔父にて候。荒き人にて分別もあらく候ゆへ、御仕置等の事には御構ひ無之よに候。年五十斗に見へ申候。いも顔にてふとく遅敷、眼ざし恐敷見へ申候。大剛の人にて合戦の時、度々の手柄も有之、内城を攻申され候時城中より降参可仕と申候に付、王より御赦免可在之と被仰付候得ども、ハトロワンス合点不申、数多殺し申候。此科にて知行の内、何ほどやらん被召上候と申候。国の作法にて、如何にも律儀に正直候故、如此の儀にても述懐無之由に候。

「ハトロワンスとおっしゃるのは、キウワンスの兄であってこれも王（順治帝）の叔父でございます。（気性が）荒い方であって分別も荒くございましたので、お仕置き（処罰）などのことにはお構ひ（配慮や心配りなど）がないというふうでございます。年は五十ばかりに見えました。いも顔であってふとく遅しく、まなざしは恐ろしく見えました。とても強い人であって、合戦の時、城を攻

撃するのにも、（そうしようと）思いさえすれば勝たないということがないということでございます。大明と韃靼との合戦の時に、たびたびの手柄もあり、（紫禁城の）内城を攻めた時も、城中から（大明の兵たちが）「降参いたします」というので、王（順治帝）から「赦免するのが良い」とおっしゃられたのでありましたけれども、ハトロワンスは納得なさらずたくさん殺しておしまいございました、この罪によって、知行のうちの幾分かを召し上げられてしまったといひます。国ぶりのご様子そのまま、いかにも律義で正直でありますため、このようなときにも、申し開きをするようなことはなかったということでございます」といふ。帝の一族たちといへども武人の気質に満ちて、戦いにあつては戦場に身を置き、実際に弓をとって馬上に戦つた事実が記述されている。

清の騎射について『韃靼漂流記』では以下のように記されている。弓には馬が伴つて語られることに注目される。

武具は、弓第一と見へ申候。弓の長け四尺斗御座候。唐の弓とて日本へ渡候其弓の形にて御座候。毎日弓稽古、馬上にても自由自在に射申候。的をも射申候。拾間廿間程にてはづれ矢は稀に御座候。馬上にて射候時、馬を駆けさせ、前後左右、自由に射申候。其弓を馬上より走りながら取申候、見物致候得ば、様々さまさま射法射曲在之候て、おもしろき事に御座候。

「武具は弓が第一と見えます。弓の長さは4尺ばかりあります。中国の弓で日本へ渡ってくるその弓の形でございます。毎日弓の稽古をし、馬上でも自由自在に射るのです。的を射ることもいたします。10間20間の距離であれば、はずれる矢は稀でございます。馬上で射る時は、馬を走らせながら前後左右に射ます。（射た）その矢を馬上から走りながら取ります。見物することができれば種々さまざま射法や曲芸のような射かたもあつて、おもしろいことございましょう。」この記述から、日本人が満州人の弓のうまいことに感嘆していることがわかる。中国を平定して北京に入城したばかりの、清軍の精鋭たちが実戦から得た射の技術は、戦国の時期を過ぎ、かつ、武士ではなかつた日本人の眼からは、妙技をきわめた技術に見えたことであろう。清の王族は武具では弓を第一とすると記述する。弓の技術が、統治するものにとっての重要な要素であることは、朝鮮・韓国の例でいえば朱蒙の場合がそうであつた。『李朝実録』の記述によれば、李成桂もやはり弓にたけていたことが強調されている¹⁸。清にあつても、弓の武力の実際効果が大切に考えられて、日ごろから訓練されていたことの一部をここに見ることができる。弓術の優れていることは「アントデイ」という武人の弓術と馬術とについて記したところにも語られている¹⁹。

アントデイと申、大名の御方へ召し呼れ候時、馬を御責め候を見申候に、前後自由なる事、中々難申尽候弓稽古、に射申候。馬上にて自由自在にて候。的廿間程まではづれ候こと稀に御座候。其弓を馬の上にて取り申候、惣じて弓馬の上手なる所にて欠物杯仕候へば殊更面白く御座候。

「アントデイとおっしゃる大名の方に、呼びだされていった時、馬を調教なさっているのを見まし

だが、前後自由であること、なかなか言い尽くすことはむずかしいくらいで弓の稽古は、馬上で自由自在でございました。的が20間くらいであればはずれることは稀でございました。(当たった)その矢を馬の上からお取りになりました。総じて弓馬の上手なところであって掛物をなさればことさら面白いものでございました。」この部分の「アントデイ」についての書き方が、「前後自由」「自由自在」「(弓の矢が的を)はずれることは稀」などその表現が先に見た記述とよく似ていることから、先の記述に記されている優れた騎射を見せたのはこの人物ではないかと思わせる。こうして満州人にとっての弓と馬の練磨の重要性が報告されている。

弓と王権との関係の重要性は高句麗の朱蒙の記述にも表れている。『三国遺事』の朱蒙の記事は次のようになっている。

生一卵大五升許，王弃之與犬猪皆不食，又弃之路牛馬避之，弃之野鳥獸覆之，王欲割之而不能破，乃還其母，母以物裹之置於暖處，有一兒破殼而出，骨表英奇年甫七歲岐嶷異常自作弓矢百發百中，國俗謂善射爲朱蒙，故以名焉²⁰。

「(生母である柳花は,) 一つの卵で大きさは五升ばかりの卵を生んだ。王はこれを捨てて犬と猪に与えたが、みな食べなかった。またこれを路に捨てたが、牛馬はこれを避けてとおった。これを野に捨てたが鳥や獣がこれを覆ってだいた。王はこれをこわそうと思ったが破ることができずに、ようやくその母に還した。母はものでこれを覆って暖かい所におくと、一児が殻を破って出て来ることになった。骨表はすぐれていて年は七歳にして岐嶷は常とは異なり、自ら弓を作って百發百中、国の俗語で弓を善く射ることを朱蒙と言うのでそれを名とした」と記す。朱蒙はやがて高句麗を建国する。建国する始祖王の資格として善射が大きな力を有していることがわかる。

このことについて、『満州源流考』では次のように書かれる。

按今満州語，称善射者謂之卓琳莽阿，卓与朱音相近，琳則齒舌之余韻也。莽阿二字急呼之音近蒙，是伝写雖訛，音解猶有可考也²¹。

「今の満州語を考えると、善く射る者を称してこれを卓琳莽阿という。「卓」の音と「朱」の音とは音が互いに近く、「琳」は則ち齒や舌の余韻であって、「莽」と「阿」の二字は急呼之音で「蒙」の音に近い。是は伝写して訛ってしまったとはいっても、音の解はまさに考えるべきものがある」という。こうして、朱蒙の名が「善射」に由来することとの関係を語源から推測している。『満州源流考』でも「朱蒙」のことが意識されていることが確認できる。朱蒙を意識するのは、朱蒙が高句麗を建国したように、清の王族が建国するに際して、弓馬の術が王たるにふさわしい条件に当たると考えられていたからでもある。『礼記』には射技について次のように言う。

射之爲言者，繹也。或曰，舍也。射者仁之道也（射の言為たる繹なり。或は曰く，舍なり。射は仁の道なり）²²。

「射の読みにはたずねるという意味があり、とどまるという意味がある。射は仁の道である」という。儒学では、弓は静かにわが身をかえりみて自分にたずねてみるもの、あるいは仁にとどまり、孝にとどまる修養のために行うもので、弓は仁の道であるということを示す。弓のうまいものは王者の道を有することになる。『老子』には次のように言う。

天之道，其猶張弓乎（天の道は、其れ猶お弓を張るがごときか）²³。

「天の道は、そもそもちょうど弓を張るようなものであろうか」という。道家でも弓が天の道に譬えられる。清の王族がそうであるように、檀君の説話²⁴、卒本扶余高句麗の朱蒙²⁵、朝鮮の李成桂²⁶、日本の神武天皇²⁷など、また近代にあっても、東学の崔濟愚は「弓弓箭」を天から授かる²⁸など、始祖王や教祖には弓が付随して語られる。弓が政権にとって重要になるのは、弓が重要な武器であるという理由からだけではなく、そこに籠められた天道の表象があるためであるとみられる。清朝が中原に入った時期の皇帝の一族たちは武人の気質に満ちて、戦いにあっては戦場に身を置き、実際に弓をとって戦った事実が『韃靼漂流記』には記述されている。『韃靼漂流記』には日本人の眼から見た、清の諸王たちの様子とその威光が記されていて、清の王族たる諸王が瀋陽から北京へと入ったばかりの自信が図らずも表されている。（以上 小林 寛）

（3）『韃靼漂流記』の「弓」の語彙

『韃靼漂流記』に記録された満州語の語彙は68語を数える。言語学の関心として満州語が徳川時代の日本人にどのように聞こえたのか、日本人の満州語および北京語のその音韻把握および外国語学習の経過については機会を改めて論ずる²⁹こととする。68語彙の、満州語と北京語と日本語の比較表について、その言語を記述した対照一覧表をここに再掲しておきたい。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8
日本語	一	二	三	四	五	六	七	八
韃靼語	Emu	Juwe	Ilan	Duin	Sunja	Ninggun	Nadan	Jakūn
衛藤本	アモ	チヨア	エテ	ドイ	スヂヤ	ニウコ	ナダ	チヤゴ
石井本	アモ	チヨウ	アテ	トイ	スヂヤ	ニウコ	ナダ	チヤゴ
番号	9	10	11	12	13	14	15	16
日本語	九	十	食	喰	飯を喰え	汁	さい	箸
韃靼語	UYun	Juwan	Buda	—	Jefu	Shusihan	Yali(肉)	—
衛藤本	ウヨ	チヨエ	ボタ	—	ゼブ	シヤシカ	ヤレ	—
石井本	ウヨ	チヨエ	ボタ	—	ゼブ	シニシカ	ヤレ	—

番号	17	18	19	20	21	22	23	24
日本語	椀家具	餅	酒	味噌	豆腐	胡椒	からし	菜
鞆鞆語	Moro	—	Arki	Misun	Defu	—	—	—
衛藤本	モロ	*ボク	アツケ	ミシヨ	タウフ	*ノウゲウ	*ケイモ	*バサイ
石井本	モロ	ホク	アツケ	ミシヨ	タウフ	ンウテウ	ケイモ	バサイ
番号	25	26	27	28	29	30	31	32
日本語	菰	馬	馬に乗れ	馬を馴らす		牛	鶏	犬
鞆鞆語	—	Morin	Morila	Feksindumbi	Hadara	Ihon(Iten)	Coko	Indahün
衛藤本	*キウサイ	モウレ	モウレヤロ	ホクセ	ハトロ	エハ	テ脱ウコ	インホウ
石井本	キウサイ	モウレ	モウレヤロ	ホグセ	タトロ	エタ	テウコ	インホウ
番号	33	34	35	36	37	38	39	40
日本語	鷹	男	女	小娘	大名	弓	矢	弓を射る
鞆鞆語	Giyahün	Niyalma(人間)	—	Sarugan jai	Amban	Beri	Niru	Gabta
衛藤本	キヤホク	ニヤアマ	ハレゼ	サカハゼ	アバソ	フリ	ニヨロ	カブタ
石井本	キヤホウ	ニヤアマ	ハラセ	サルハセ	アバソ	フリ	ニヨロ	ガフタ
番号	41	42	43	44	45	46	47	48
日本語	きせる	たばこ	火	水	湯	家	川	船
鞆鞆語	—	Dambagu	Tuwa	Muke	Halhüm Muke	Boo	Bira	Guwan Yuwan
衛藤本	*ダイ	タバコ	トア	ムツカ	ハル	ボウ	ベウ	チヨアン
石井本	タハ	タバコ	トア	ムツカ	ハルコ	ホウ	ヘウ	チヨアン
番号	49	50	51	52	53	54	55	56
日本語	猿	相撲	ご馳走の礼言	城	貴人への礼	今日	明日	明後日
鞆鞆語	(Bonio Monio)	Jabunumbi	Baniba	Hoton	—	Inenggi	Gimari	Goro
衛藤本	ウバイ	ジャバナケ	ハンネハ	ホツ	ニヨツカウ	イノキ	チマハ	チャウレ
石井本	ウバイ	シヤハナ	バンネハ	ホツ	ヨツコウ	イノキ	チヨリ	チャラレ
番号	57	58	59	60	61	62	63	64
日本語	日	月	日月の出づること	月の入る	朝	星	晩	海
鞆鞆語	Sun	Biya	Tucimbi	Dosikabi	—	—	—	Mederi
衛藤本	シユン	ビヤア	ドキメ	トツカメ	—	—	—	モトリムツカ
石井本	シユン	ヒヤア	ドキトメ	ドツカメ	—	—	—	モトリムツカ
番号	65	66	67	68	69	70	71	72
日本語	眼	鼻	口	耳	手	腹	足	駱駝
鞆鞆語	Yosa	Oforo	Anga	San	Gala	Dolo	Bethe	—
衛藤本	ヤサ	ヲホロ	アンカ	シヤ	カヲ	ドロ	ボチコ	トモ
石井本	ヤサ	オホロ	アンカ	シヤ	カウ	トロ	ホロコ	トモ

番号	73	74	75				
日本語	通事	童子	総計				
韃靼語	Tungse	Ajige	—				
衛藤本	トクソウ	アチキ	六八				
石井本	ドクソウ	アシキ	六八				

『韃靼漂流記』原文から改編して作成

ここから言えることを簡単に記しておくならば、徳川時代の日本人にとって、母音については「e」が「aa」に、「mu」が「も mo」（「u」が「o」）に、聞こえている。母音の聞き取りないしは表記が混同する箇所が多くある。また、語尾すなわち韻について「ggun」が「こ ko」に、「kun」が「こ ko」に、「yun」が「よ yo」に、「sun」が「しよ siyo」に、聞こえていて、韻に含まれている子音の聞き取り、表記が混乱していることがみられる³⁰。聞くことはできても、発音することができても、それをその言語以外の、別の言語の文字で記すのは難しいことを、ここからも確認することができる。また、写本の特徴として表記から濁音を落とす傾向があるのが江藤本、石井本であるといえる。

弓の語義について、「弓」の満州語は『韃靼漂流記』では、このように書かれている。

一、弓を韃靼にてはふりと申候。矢はによると申候。弓を射候事は、がふたと申候。

「一、弓を韃靼では「ふり buri / huri」と言います。矢は「による niru」と言います。弓を射る事は、「がふた gabta」と言います」と記す。満州語の「弓 buri」は「puri」「furi」「huri」とも表記されていて、こうした発音は、朝鮮韓国語の「弓 hoal」「火 pul」と連関すると説明する場合もある³¹。その場合は、朝鮮韓国語の「弓 hoal」は「白 hwida」と音韻の面からいえば「hoa」「hwi」で関連するという。「射る・がふた」という動詞の記述は、「射る gabtambi」のことを指すとみてよい。満州語では「①遠くから射る ②光を放つ ③中心から放出される」の意であって、光と矢の連想がある。「発光 gabtabumbi」「弓術 gabtan」という語彙もこのことを裏付ける。始祖王の出現にまつわる説話には太陽の表象が表れ、「太陽 sun」は「白 sanggiyan」と連関する³²。朱蒙の語義については「巫術者 saman」「索摩 soma」と連関があって、「満州朝廷の祭祀儀礼に立てられる神竿が祖宗竿・索摩竿と呼ばれているが、索摩 soma は神霊・祖霊を意味する語らしく、また朱蒙と同義と考えられる。とすれば朱蒙は本来神霊ないし祖霊を呼んだものと解される³³」という解釈があり、また、「神・王の古語、cum→kum→kam→カミである³⁴」という解釈があり、朱蒙の語義と神霊との連関が語源から考える研究者がある。先に見たように「按今満州語、称善射者谓之卓琳莽阿、卓与朱音相近、琳则齒舌之余韻也。莽阿二字急呼之音近蒙、是伝写雖訛、音解猶有可考也（今満州語を考えると、善く射る者を称してこれを卓琳莽阿という。「卓」の音と「朱」の音とは音が互いに近く、「琳」は則ち齒や舌之余韻であって、「莽」と「阿」の二字は急呼之音で「蒙」の音に近い。是は伝写して訛してしまったとはいっても、音の解はまさに考えるべきものがある）」という、語源

から朱蒙と連関させて見る考えは満州にもあった。朱蒙の名が「善射」に由来することとの関係を語源から推測している。『満州源流考』でも「朱蒙」のことが意識されている。『満州実録』の清の始祖伝承は次のように記されている³⁵。

満洲原起於長白山之東北布庫哩山下一泊。名布勒瑚里。初天降三仙女。浴於泊。長名恩古倫。次名正古倫。三名佛庫倫。浴畢上岸。有神鵲。銜一朱果。置佛庫倫衣上。色甚鮮妍。佛庫倫愛之。不忍釋手。遂銜口中。甫著衣。其果入腹中。即感而成孕。告二姊曰。吾覺腹重。不能同昇。奈何。二姊曰。吾等曾服丹藥。諒無死理。此乃天意。俟爾身輕。上昇未晚。遂別居。佛庫倫後生一男。生而能言。俟爾長成。母告子曰。天生汝。實令汝衣定亂國。可往彼處。將所生緣由。一一詳說。乃興一舟。順水去。即其地也。言訖。忽不見。其子乘舟。順流而下。至於人居之處。登岸。折柳條。為坐具。似椅形。獨踞其上。彼時。長白山東南鄂謨輝。鄂多理內有三姓。爭為雄長。終日互相殺傷。適一人來取水。見其子。舉止奇異。相貌非常。回至爭鬥之處。告眾曰。汝等無爭。我於取水處。遇一奇男子。非凡人也。想天不虛生此人。盍往觀之。三姓人聞言。罷戰。同眾往觀。及見。果非常人。異而詰之。答曰。我乃天女佛庫倫所生。姓愛新覺羅。名布庫哩雍順。天降我。定汝等之亂。因將母所囑之言。詳告之。

満州国の源は長白山の東北、布庫哩山のふもとにある、布勒瑚里という名の池から起こった。その昔、天から仙女三姉妹が天下って水浴びをしていた。長女は恩古倫、次女は正古倫、三女は佛庫倫といい、水浴びを畢って岸に上がると、神の使いであるカササギがひとつの朱い実を運んで来て佛庫倫の衣の上に置いた。色はとても鮮やかで美しかった。佛庫倫はこれを愛して、我慢できずに手にとって、とうとう口の中に入れた。そうして衣をつけたのであったが、その実は腹の中に入って、たちまち感じて孕んだ。佛庫倫は後にひとりの男のこを生んだ。生まれてすぐに語ることができ、すくすくと大きくなった。男子は布庫里雍順という。布庫里雍順は容姿端麗にして聡明であり、成長すると川を下り、争っていた3つの部族を治めて満州族の始祖となった。それから数代経て、彼の子孫は人々に暴虐を働き、一族は皆殺しにされる。ただ一人、幼い范察だけは生き残ることが出来た。范察から数代の後に肇祖原皇帝・都督孟特穆が登場し、彼は悲願だった失った地位を取り戻し、赫図阿拉（hethuala、現在の遼寧省撫順市付近）に居を構える。その後、興祖直皇帝・福満、そして景祖翼皇帝・覚昌安、さらに顯祖宣皇帝・塔克世へと続く。塔克世には5人の子があり、その一人がヌルハチで、清の初代皇帝となった、という。この説話は満州の始祖神話あるいは起源神話とされるもので、王朝の始祖王であるヌルハチの出現につながる始祖の出現とその系譜を語る説話で、満州語のテキストでは必ず取り上げられる。朝鮮韓国で檀君神話が取り上げられるのとあたかも似通った位置づけにある。

この説話によれば満州国の源は長白山の日の浮き出る方にあるという。中国名の「長白山」は朝鮮名の「白頭山」であって、「白」を名称とする始祖の故地とされる。原文では「白山」と語られている。始祖の出現地は「太陽が浮き出る方向」であると、明確に始祖と太陽との連関がみられる。太陽が昇る方角にある「布庫哩 bukuri」という名の「山」、布勒瑚里 bulhuri」という名の「池」

から満州は起こったという。天女の三姉妹が水浴びをしていると、神の使いであるカササギが朱い実を運んで来たという。始祖王を生む女性は水と親和性を有しているという表象をこの伝承も有している。朱蒙を生んだ柳花は河の神、河伯の娘であった。河に入って水浴びをしているところは、溝や窪みに身を置いて始祖を身ごもる伝承とのつながりが確認できる³⁶。ここにはカラスと同族の黒い鳥であって、しかし白が羽に入っている青みがかった鳥である「カササギ」に表れている。末の娘・仏庫倫は、カササギが運んできた赤い実を口に入れると、たちまち身ごもり、布庫里雍順という男子を産んだという。「布庫哩 bukuri」「布勒瑚里 bulhuri」という地名、「布庫里雍順」という名前には、どちらも満州語の「bul」という、「豊かな地 bur bur seme」「春の川の水が漲る bul bul seme」という、「膨らむ力」を表す意味につながる音を有している。

おわりに

『韃靼漂流記』には日本人の眼から見た、清の諸王たちの様子とその威光が記されていて、清の王族たる諸王が瀋陽から北京へと入ったばかりの輝く自信を示す、満州人にとっての弓と馬の練磨の重要性が報告されている。

満洲の王族がそうであるように、檀君の説話、卒本扶余高句麗の朱蒙、朝鮮の李成桂、日本の神武天皇など、始祖王には弓にかかわる語彙が付随して語られ、政権にとって重要になるのは、弓が重要な武器であるという理由からだけではなく、弓が天道に譬えられ、そこに日の表象が内包されているからであると考えられる。日の表象には、巫術からの影響がある。明るい太陽を求め意識の上で自分のものとするならば、暗い闇にいつそう籠る手段によって、これを成就しようとする儀礼が王権の表象にひそむ。日光と清水とは、生命の根源ともいうべき太陽の力と大地の力とを表していて、これを融合してこそ統治者であるとする考えが、宗教的意識にもつらなる深層意識に流れている。清朝が中原に入った時期の皇帝の一族たちといえども武人の気質に満ちて、戦いにあっては戦場に身を置き、実際に弓をとって戦った事実が『韃靼漂流記』には記述されている。瀋陽から北京へと入ったばかりの自信あふれる輝く日の王権の一端を言語の面からも看取することができる。

（以上 金 河守）

（こばやし・ひろし つくば国際大学非常勤講師）

（きむ・はす 目白大学外国語学部准教授）

註

- 1 本学（つくば国際大学）非常勤講師
- 2 目白大学外国語学部准教授
- 3 王権と騎射の意義の部分は東アジア思想の観点から小林寛が担当する。
- 4 騎射の語義の部分は言語学的関心を中心に金河守が担当する。
- 5 園田一亀『韃靼漂流記』平凡社1991年、14頁を参照されたい。
- 6 1636年、ホンタイジは国号を清と改めた。

- 7 園田一亀『韃靼漂流記の研究』を参照されたい。また、園田一亀『韃靼漂流記』平凡社1991年93頁を参照されたい。
- 8 前掲『韃靼漂流記』23頁を参照されたい。
- 9 前掲『韃靼漂流記』30頁を参照されたい。
- 10 『韃靼漂流記』を参照されたい。また、拙稿「“달단표류기”에서 보는 ‘해’의 상징과 왕권」目白大学紀要人文研究10号を参照されたい。
- 11 北京語のローマ字表記ではこうなる(四声は省略した)。
- 12 『韃靼漂流記』ではこう表記される。
- 13 アダム・シャルはラテンつづりの表記で記している。
- 14 園田一亀『韃靼漂流記の研究』鉄道総局庶務課1939年、後に『韃靼漂流記』平凡社1991年に収められている。同書154頁を参照されたい。
- 15 『韃靼漂流記』ではこのように表記されている。
- 16 北京語の漢字表記はこのようになる。
- 17 『韃靼漂流記』ではこう表記される。「ハトロワンス」がさしているのが、英親王のことなのか、礼親王清のことなのか、いくつか説がある。
- 18 『朝鮮実録』を参照されたい。
- 19 内藤本、古老本、帝図本にはこの記述がみられる。
- 20 崔南善『三國遺事』瑞文文化社1987年40頁を参照されたい。
- 21 『満州源流考』を参照されたい。
- 22 『礼記』「射義」を参照されたい。
- 23 『老子』第七七章を参照されたい。
- 24 「阿斯達」のことを別名「弓忽山」ともいうと、『三國遺事』檀君説話では語られる。
- 25 弓をよく用いるものを「朱蒙」というと『三國史記』『三國遺事』では語られる。
- 26 『朝鮮実録』では李成桂の弓のうまさ執拗なくらいに描かれている。そのように記録する理由があったとみなければならない。
- 27 神武天皇の弓に金鷲がとまって敵の眼をくらませることが『古事記』『日本書紀』には描かれる。また日本の宮中では悪霊払いに弓が用いられる。
- 28 『東学経典』を参照されたい。
- 29 拙稿「韃靼漂流記の語彙と表記」『日本韓国語教育学会記要』第3号を参照されたい。
- 30 日本人の発音上の特徴については、拙稿「韓国語教育の問題点—日本人初学者の発音の問題—」『韓国文化院教員講習』2013年5月を参照されたい。
- 31 徐廷範『國語語源辞典』ポゴ社2000年を参照されたい。
- 32 『満州実録』を参照されたい。
- 33 三品彰英『三國遺事考証』390頁を参照されたい。
- 34 柳柱東の解釈を参照されたい。
- 35 河内良弘『満州語文語文典』京都大学学術出版会、1996年、167頁、また、津曲敏郎『満州語

入門20講』大学書林2002年，106頁を参照されたい。

- 36 司馬遷の『史記』によれば，殷や周の始祖の出現について，姜源は巨人の足跡を踏んで感じて身ごもった説話や，燕の卵を飲んで身ごもった説話が描かれる。王朝を創始する始祖王の伝承にはこうしたモチーフが語られている伝統がある。

参考文献

- 園田一亀 1939年『韃靼漂流記の研究』鉄道総局庶務課
園田一亀 1991年『韃靼漂流記』平凡社
南周成訳注 2010年『欽定満州源流考』クルモア出版
津曲敏郎 2002年『満州語入門20講』大学書林
徐廷範 2000年『國語語源辞典』ポゴ社
河内良弘 1996年『満州語文語文典』京都大学学術出版会
三品彰英 1975年『三国遺事考証』塙書房
『李朝実録』『仁祖朝実録』
『清世祖章皇帝実録』『順治二年』
『満州実録』『礼記』『老子』『史記』『三国遺事』『三国史記』

Significance of shooting with a bow and arrow in “Dattan hyoryu ki 韃靼漂流記”

KOBAYASHI, Hiroshi

KIM, Ha-soo

“달단표류기(韃靼漂流記)”는 1644년 일본 에치젠(越前)의 뱃사공과 상인이 태풍에 휘말려 해상을 표류한 뒤 ‘달단국’ 즉 ‘청나라’에 표착해서 보고 경험한 내용을 일본 귀국후 도쿠가와 막부(徳川幕府)의 관리에게 구술, 기록한 문서이다. “달단표류기”에는 청나라의 정치, 문화 등 폭넓은 분야에 걸친 기록뿐만 아니라 그 해 새로이 시작된 청나라 왕조의 왕권의 일단을 엿볼 수 있는 모습도 기록되어 있다. 옛 부터 왕조는 왕권을 과시하기 위해 궁마술을 왕권의 상징으로 내세워 왔다. 본 논문에서는 “달단표류기”를 제재로 하여 이러한 사실을 검증해 보기로 한다.청조 왕권의 궁마술속에 관한 기술과 왕권을 상징하는 어휘에 관해서 논하고자 한다.

キーワード

“달단표류기(韃靼漂流記)” 궁마술속 청나라 왕권